

乱読する毎日（2004年9月～2005年1月）

——個人的読書案内記——

かね まる ゆう いち
金 丸 裕 一

はしがき

2004年度後期において担当した学部専門科目「東アジア社会経済史」は、久しぶりにびわこ・くさつキャンパスにおいて開講した大講義であった。この科目は、主な目的が学生たちに東アジアの隣人たちのここ100年くらいの間の歴史を知ってもらうことにある。換言すれば、21世紀のわが国を背負うあなた方に、隣人たちにとっての「常識」について理解してもらい、今後の経済人としての、あるいは健全なる社会人・市民としての「良識」と「寛容」なるところを育成して欲しいという願いに基づいて進められた試みであった。

わたくしは常々、「自分」だけでなく「他分」に対する気配りが可能な人間が、これからの世の中に多く出現して来たならば、なにかとギクシャクとする国際間の諸問題も、いずれは解消する方向に向かうのではないかと考えていた。かなり楽観的な、あるいは性善説的な世界観である。しかし、別府温泉山中のAPUに出向している4年間、日本の若者たちがあまりにわが祖国・民族の歴史について知らないことに驚いた。何もこれは日本人ばかりでない。中国人も中国の、韓国人も韓国の、台湾人も台湾の「近代」について、あきれる程に無知なのであった。

たしかに、若い人々にとっては自らが出生する前の、「遠い昔」の出来事といえなくもないが、ここ100年や50年の間に発生した事どもは、なんやかんや

言うても「現代」を形成するたいせつな土台となっているのだ。いま進行している何らかの現象に対する表面的観察だけでは、社会を構造的かつ動的にとらえる力量は、決して身に付かないのではないかと危惧した次第であった。ましてや「国際化」が念仏のように唱えられる時代になったんだから、自らの足下を理解せずして、「他分」への理解もへったくれも無いだろう。

このような経緯があり、2004年度の講義では、配布するレジユメの「埋め草」として、個人的な読書と研究活動の記録を試しに載せてみた。あまり詳細な講義内容をプリント配布してしまうと、それを持ち帰って「満足」する不逞な輩は、古今東西どこにでも存在している。かつてのわたくし自身の経験を振りかえり、資料はなるべく簡単で単純な内容としたものだから、余白が多くてどうも格好がつかない。よって、「日々是乱読」と銘打ったコーナーが、なんだかいつの間にかレジユメの半分位を占める勢いになってしまった。

本稿においては、それをすこし修正のうえ再録することにした。駄文ではあるが、社会経済問題を学ぶ際、読書という営為が、いかに楽しくてかつ大切なのかという事を、一人でも多くの学生に伝えることができればいいなと願っている。

壹 なぜか北海道は北見枝幸から

時には講義内容と関係するかも知れないが、基本的には教育や研究とは無関係に、講義担当者が乱読している本やその他のことなどを紹介してみたい。

私の専門は中国における電気の歴史である。だからという訳でもないが、伝記も大好きだ。最近読破した中では、角田房子『一死、大罪を謝す』（PHP文庫、04年）や、西木正明『其の逝く処を知らず』（集英社文庫、04年）などは、著者の取材力に脱帽してしまう。歴史の陰に埋もれた人物を、よくもまあここまで丁寧に発掘したものだ。本来は勤勉であるべき大学教員の多くが、多忙を理由に研究を放棄した昨今、調査能力のイロハは、むしろ作家に学ぶべきかも知

れない。吉村昭・澤地久枝・城山三郎など、ぼくは大好きである。

夏は中国2回、東京・横浜、そして北海道と飛び回っていたため、文庫本や新書を持ち歩くことが多かった。秦郁彦『旧制高校物語』（文春新書、04年）は、現代日本の「学閥」問題を理解するための必読本。また、平山洋『福沢諭吉の真実』（同上、04年）は、脱亜をめぐる「常識」的評価を疑う手法がおもしろい。もっとも悪文であるのが玉に瑕。また、黒羽清隆『太平洋戦争の歴史』（講談社学術文庫、04年）は、歴史叙述が生き生きとした作品の再版であり、戦争のことどもに興味がある人は、ぜひとも手にとって読んでほしい。

北海道大学での学会のついでに、宗谷支庁枝幸町に出かけて、近代中国科学史関係の史料調査を行ってきた。電気と中国人は、世界中どこにでも存在しているから、出張名目はいくらでも見つかる。余談ではあるが、同町のスーパーには中国語の貼紙があり、また雑貨屋兼用の本屋をのぞいたら、ぶ厚い中国語辞典があったのでおどろいた。役場で聞いたら、牧畜と漁業の研修名目で、数百人の中国人が本当にいた。事前に下調べのため、『枝幸町史』上・下（同町、67・71年）を読み、「たぶんここにある！」との直感をえた。札幌からバスで5時間、余青松など「北海道隊日食観察報告」（『宇宙』7-3、36年）を発見した時には大感激。大量のコピーを持って帰宅したが、同町図書館への町外からの取材は、作家・吉村昭以来はじめてとのこと。早速に枝幸町を舞台とした『脱出』（新潮文庫、88年）を買い一読したが、もう何処に置いたかわからなくなった。

ウルトラ整理法とダイエット法を発見して、いっぺんくらいはベストセラーを書いてみたい気もするが……。

貳 旅先での読書

先週の週末（10/9）から12日まで、やたらと移動が多かった。台風の土曜日は彦根。滋賀大学経済経営研究所における所蔵資料に対する「外部評価委員

会」で終日過ごし、翌日の朝イチで空路福岡へ。そして月曜のこれまた朝イチに関空経由で京都入りし、夕刻まで京都ホテル・オークラで拘束される。もっとも、連休は実はゼミ生の結婚式連ちゃん。二組とも国際結婚だったから、主賓の緊張感はあったものの場は楽しい。ビール片手に会場をまわり、名刺交換しながらゼミ生の就職先候補を物色。これはごっつい営業活動やで!!

しかし、こんな「楽しげ」な日々の中でもストレスはたまる。爆発したらアホになるから、爆発させない。今週こそ青窈ちゃんの「珈琲時光」でも観に行こうかと思ったら、京滋では上映しておらん。関西は文化でもなんでもかんでも、東京圏に負けたのは確実や。手っ取り早く、旅先で本屋に飛び込むのが、次善の策か。

彦根では、京町のひなびた書店で越沢明『東京の都市計画』（岩波新書、91年）の売れ残り発見！ 自分らが関わる地域の来歴を知るとは楽しいし、特に景観の由来などを考えると、理論では難しく感じる多くの問題が、風景の中に凝集されているような気もしてくる。日曜日の福岡では、懐かしの天神地下街で、外交官としてのキャリアを誇る100歳の老人・加瀬俊一『第二次世界大戦秘史』（光人社文庫、97年）を。しかしまあ、なんで極東や「大東亜」の戦局に論及されていないんだろうか？ 欧米中心世界観って、きっとこんな小さな本にも反映されているんだなと思う。

膳所駅裏の古本屋では、かつてウン千円で買った角田房子『いっさい夢にござ候』（中公文庫、75年）が200円で売っていたではないか！ 悔しいから購入して後悔した。でも、「軍人」をカーキ色のステレオタイプで捉えがちな我々に、この伝記は衝撃的だっせ。最後に今週のベストは、広重徹『科学の社会史』上・下（岩波現代文庫、03年）。日本やアジアの近代を考える時、「制度化された〇〇」って概念、すごく有効だと思った。

参 神田はすごい！

神田の古本屋街を探して、国電（現 JR）山手線神田駅で下車してしまったのが、高校生の頃であった。恋愛でもギャンブルでも、覚えてたの時期にハマってしまい、猿みたいになる人も多い。私の記念すべき1冊目は、中2で読んだ北杜夫『どくとるマンボウ青春期』（中公文庫、68年）であった。その後、北杜夫の作品はだいたい読破し、しばらくはいろいろな文庫本の乱読で片づいていたけれど、そのうちに横須賀や横浜の本屋ではもの足りない気がして、ついに神田遠征となった次第であった。

しかし、神田の古本屋街は、神田駅からは相当離れていた。むしろ、お茶の水や水道橋から近い。それを知らない人が多いらしく、神田駅に古本屋街の案内が表示されていたのに気がついたのは、しばらくしてからである。見た時になぜか安心した。

150軒くらいの本屋があつまっているから、ともかく壮観な街である。学生時代には週に2～3回は冷やかにいったかも知れない。早稲田の古書街とあわせると、かなりの小遣いやバイト代をぶち込んできたはずだ。この所2週続けて週末は東京で会議があったから、当然時間をつくって神田・神保町へ行く。今年は、日本学術振興会などからたんまり研究費を貰ってるから、値札を見ないで何冊かレジに運んでいく。昔の敵を討ったようで嬉しい。しかししかし、5冊で10万を超えている……。悪い女よりも更に悪質な遊びだよ……。

ここまで浪費しておくも、なお車中で読もうなどという言い訳をしながら、先週も今週もまたまた買ってしまいました!! 原武史・保阪正康『対論 昭和天皇』（文春新書、04年）は、まあまあ読みやすく面白い本であるが、やはり戦争責任問題には曖昧な表現だな。山田朗『大元帥昭和天皇』（新日本出版社、95年）などと併せて読んだ方が良さそうだ。松本健一『大川周明』（岩波現代学術文庫、04年）は、謎の多い大物右翼理論家の評伝。「よしりん」読んで国士気取

るアホには、平泉澄『日本の悲劇と理想』(錦正社, 94年)などの本格右翼の著作だとか、多くの評伝をしっかり読んで貰いたいもんや……。

理由は自分でもわからないが、衝動的に『般若心経』(東方出版, 83年)を買ってしまったその日に中越大地震発生。今週の新潟出張には持参しよう。そういえば、神保町が舞台の一青窈主演「珈琲時光」まだ観てない。三枝夕夏 in dbとかより、「ハナミズキ」や「大家」の方がよっぽどいいわ。

肆 新潟で「大三元」?

趣味はと聞かれると、旅行・読書と答えるようにしているけれど、これらは趣味というよりは「仕事」であり、「気が向いたら」なんて流暢なことは言うておられない。でもたいへん無難な回答である。私の密かな道楽を知られなくて済むという安堵感も得られる。実はここ何年かの間、筆記用具とカバンと時計にハマっているのだ。

先週は、震災で中止になるかも知れないと思っていた国際会議が、根性で開催された。現地の実情もよく判らず、あまりウロウロ出歩くなと妻からもきつく命じられていたので、予定していた中国現代史研究の大先輩・古厩忠夫先生の墓参は中止し、新潟の中心部を散歩して会議を待った。出張先では、たいがい本屋に顔を出す。別に挨拶しに行くわけではなく、散財するためである。動物的嗅覚で大きな書店にたどり着くと、「ご当地モノ」本を探す。新潟大学で企画しているシリーズを発見。荒井研一『「日本海」という呼称』(新潟日報事業社, 02年)、西埜章『新潟の戦後補償』(同上, 02年)を求める。2冊の本ともに、コンパクトであるが事実関係をキッチリと調査・分析してる本だ。本学でも、こうした知識の社会に対する地道な還元を見習えばと痛感した。地域の核となる大学だけでなく、日本では地方史研究を支える人々の層が厚いので、なにかを詳しく調べたいと思ったときなど、ほんとうに助かる。他の本を含めて、だいぶ紙袋の荷物が重くなったから、ここで道楽の本領発揮! 夢遊病患

者のごとく足は鞆売り場に向かい、嗚呼「金丸うさぎ」現象……。

後悔しながらホテルへ帰り、先程の鞆を愛でていたら、珍しく国産品だ。しかもわざわざ兵庫は「豊岡製」と書いてある。6年ほど前、妻子と工房見学に行き圓山川沿いを歩いた。堤防決壊全市水没との報道に心を痛めていただけに、少しだけ良いことをしたような気になってしまった。その勢いか、帰路用に読もうと菅野覚明『武士道の逆襲』（講談社、04年）も購入。「我国の伝統文化」などという思いこみが、実は近代の産物であったと知る。

膳所到着前、ターミナル駅のキオスクで松本清張『神々の乱心』上・下（文春文庫、00年）まで購うも、いくら鞆に放り込んでもビクともせん。豊岡カバン頑張れ！ 自室に隠れてレシートを整理していたら、飛び込んだ店はあの「ダイエー」だったことを知る。この「大三元」、はたしてツモか天和か？

伍 野口英世博士に思う

千円札のデザインが変わった。清作坊主から英世に出世し、晩年にはノーベル賞有力候補にまで成り上がった、髭の野口博士である。新潟の街角で、「あの島より福島」といった笑えるコピーとともに、博士の肖像が街角に何枚も掛けられていたから、福島としては必死の売り込みなんだろう。立派な野口先生が、本当は大の道楽者でもあったと知ったのは、渡辺淳一『遠き落日』（集英社文庫、90年）に接してからである。酒色浪費の極みを尽くし、血脇守之助という歯学者に金銭的尻ぬぐいをしてもらう様は、ホンマにびっくり仰天であった。たとえ1,000円といえども、皆がこの調子で出費・道楽を重ねたら、景気もみるみる回復するはずや。

思いこみは怖い。渡辺淳一というと、絶頂時に毒薬を飲んで心中するという、例の『失楽園』を書いたスケベ作家と思う節も多いかも知れないが、れっきとした医師・医学博士である。清作の「テンボウ」の整形外科の考察や、英世の研究成果の細菌学的再吟味などは、たいへん説得力があった。しかし世の中で

図 「あの島より、福島」



● 野口英世物語
● みなさまのご意見
● Fukushima Airport

マップで見る
福島県

野口英世物語

茲に不思議なるは夢なり。
必ず小学校時代及幼年時代の事のみ夢みることに候。・・・



<ごあいさつ>

「あの島より、福島。」
我が故郷、福島県へようこそ。
野口英世です。

ここで皆さんに出会ったのも何かのご縁。
わずかの時間、私にお付き合いください。



出典：福島県知事直轄県政広報グループの「野口英世物語」<http://www.anoshimayori.com/hideyo/index.html>

は、こりゃあまりに書きすぎやと文句を言う人たちも頑張っているようであり、最近でも北篤『正伝 野口英世』（毎日新聞社、04年）や小暮葉満子等『野口英世—21世紀に生きる』（日本経済評論社、05年）などの力作も生まれている。子供向けを含めたら300冊位になるだろう伝記を、丹念に比較すれば立派な研究になるだろう。

経済史を含め、歴史学は第三者による検証可能性が最大の科学性の担保である。野口博士をめぐる評価の移りかわりのことなどを考えながら、先週は中塚明『歴史家の仕事』（高文研、00年）に感銘し、久々に赤線を引きながら読破。勢いで同『日本と韓国・朝鮮の歴史』（同、02年）も読む。私は朝鮮史を専門に

していないので、この方面の講義はしないようにしているが、やはり「知るべき」隣国だ。後者は簡単な本だから、乞御一読！ セニョボス・ラングロア『歴史学研究入門』（校倉書房、89年）なんて、100年以上前に書かれた本なのに、まだまだ強い生命力がある。書いた端からゴミになるような成果を、最近「研究」と僭称する傾向があるようだ。パソコンばかり並べた「図書館」同様、いつの日にか成敗したいと思う。

そういえば博士にはまだ対面していない。いまなお横浜あたりの酒場が遊郭で管を巻いてるのか？

陸 珍しく膳所で読書

映画の本とか、馬鹿にして余り読んだことがなかった。過信や思いこみは怖い。先日テレビで、秋葉原で「メイド喫茶」や「美少女フィギュア」とかに狂っている男の特番をみて、情けないとか変態だとか嘆いていたら、本にハマって買い漁り読み倒す小生も、その精神構造上は大差ないと配偶者から指摘されて、ハッとした。北野武のフィルムが「芸術」であるといえれば別に違和感はないだろうが、「コマネチ」とかいう芸を演じていたビートたけしが、かくも大化けするとは思ってもいなかったのだから、私の感性なんてたかが知れている。

今週の1冊目は、粉雪まみれ『恋愛中華電影明星誌』（集英社、01年）から。香港映画を中心にまとめられた本である。途中まで読んで放って置いたんだけど、こんな面白い本はないと、しきりに家内が褒めるから読み直した。こりゃたいしたもんや！ 文章が達意であるのみならず、映画を観たくなるような叙述がいいわ。しかし、単なる娯楽作品というよりは、巻末にごついデータが整理されており、こちらへんがおもしろさの基礎にあるんやなど、なぜか納得させられた名著。この人が書いた他の映画評論も、かなり娯楽系だけど、程良くアカデミックだ。特にアジアの文化に興味がある人には、絶対にオススメの本だと思う。

100年前の今頃、わが国は日露戦争の渦中にあった。国際デビュー100周年と聞くと、歴史的時間の長ささと早さが入り乱れて感じられる。『いま問われる日露戦争』（読売新聞東京本社、04年）は、この戦いを簡明にまとめたもので、学生には最適の450円。矢吹晋『ポーツマスから消された男—朝河貫一の日露戦争論』（東信社、02年）は、異色の国際人を描く作品。ちなみに、アホ市長によって廃校させられそうな横浜市立大学が刊行する学術シリーズ一般向けの1冊。なぜに立命館はあっち方面のパンフレットや何かには大枚をはたくけど、こっち方面の学術活動の社会的公開にはあまり力を入れないのか？

吉村昭『ポーツマスの旗』（新潮文庫、83年）は、「売国奴」と罵られた外交官の見直しを迫った労作。やはり時間をかけて書いている本である。早稲田や慶應・同志社は、100年以上を費やし名門校になっていった。わが立命館も、いままさにその途上にある。伝統に引きずられる恐ろしさは、日露戦争の英雄・東郷平八郎を現人神視した結果たる軍艦至上主義の破綻等に象徴されようが、焦りすぎて失敗した経験は、凡人になら誰にでもあるはずだろう。何故にかくも急ぐか、ほんとうに謎である。

柴 疲れ果ててもまだまだ読むぞ！

自分の仕事や遊び、あるいは子供たちとの付き合いなどでへとへとになったとしても、疲労には不思議な心地よさが残る。それが、自分とは全く関係の無い第三者の怠慢、あるいは嘘によって振り回されたりした場合、どうしようもない不愉快な悔しさだけを感じるのは、決してわたくしだけではないだろう。しかし、なんでだか判らないけれど、先々週の初め頃から、そんなことが続いてしまい、愚痴をこぼしたり、書類上の記載事項を確認するためにわざわざ上京して調査をおこなうなど、散々な日々が続いていたのであった。

したがって今週は、軽めの本に遊びを求めた。内藤陽介『戦争と切手』（新潮新書、04年）は、デザインやスタンプだけでなく、使われた封書の中に歴史

の細部を描こうとするもので、気楽に読めた。同じような本に、『沈黙の語り部』（日本僑報社、02年）があり、コレクターが集めた日中戦争関係の様々なコレクションを紹介する内容だ。

読み進んでいくうちに、ふと考えた。「確かに面白い……。しかしそこに『発見』はあるのだろうか？」と。「クリオの神（歴史の神様）は細部に宿りたもう」というが、細部を勘違いしているのではないかと……。立命館の卒業生である小谷賢『イギリスの情報外交』（PHP新書、04年）などの方が、辛気くさい作業を通じて、「なるほど！」と人を唸らす発見をしているように感じた。勢いついでに吉村昭『陸奥爆沈』（新潮文庫、70年）もポケットに入れて持ち歩いていた。

健康診断でたっぷり説教までされてしまった日、余計に落ち込んでいたら、文藝春秋の『諸君！』から突然の原稿依頼。右翼雑誌が左翼を探しにくるとは、なんとも不思議な時代だ。

捌 立命館ゆかりの本たち

立命館にゆかりがある本を、たまたま何冊か続けざまに読んだ。奈良本辰也『武士道の系譜』（中公文庫、04年復刻）は、日本近世史研究者として名高い筆者が、立命館大学辞職直後に執筆した一冊の復刻。文庫本のくせに1,300円もするが、学生運動最中の雰囲気、学術研究を通じて見事に伝えている。名高い文学者たる高橋和己らとともに、なぜ筆者が立命館を辞職したのか？ 君たちが生まれる遙か以前の、もしかしたらお父さんとお母さんもまだ知り合っていないような時代ではあるが、一寸のぞいてみたらいかが？ 世界史的にもパリのカルチュ・ラタンで学生が、中国では文化大革命で「紅衛兵」が大暴れた時代は、皮肉なことに今日におけるネオコン跋扈の生みの親なのかも知れない。

明日12月8日は、「大東亜戦争」開戦の日。戦時中に毎月8日は、「興亜奉公日」と定められていたという。梅田地下街の古書店で技術院『大東亜棉作試験

要覧』(霞ヶ関書店, 45年)を見つけた。奥付を見ると, 昭和20年3月10日に東京で出版されている。まさに東京大空襲の当日じゃないか! なんて残ったのか? とても不思議だ。

先の世界的若者騒動と同じく, 多くの当事者たちが, 戦前の全ての事象への自己批判なしに, 戦後は右から左へと180度転換したことが, やはり新世紀にはびこる無思想的風潮を生み出したのかもしれないなどと考える。保阪正康『「きけわだつみの声」の戦後史』(文春文庫, 02年)は, わが国際平和ミュージアムの「わだつみの像」なども随所に登場し, 教条主義的民主主義のもろさを示唆する作品だろう。わが学園の右へ回れ(あるいは右往左派)は, やはり歴史的必然か?

とはいえ, かの中華人民共和国の「人民民主主義」を称えることができるような時代ではない。赤い成果主義は, 確実に人々の道徳を低下させ, モラル・ハザードの大群が, 平成不況にあえぐわが国の権益と安全を脅かす。やはり, 高島俊男『中国の大盗賊・完全版』(講談社現代新書, 04年)的な見方が, 一般的常識なんだろう。隣国からわが国に「出稼ぎ」に来ている風体の, あまりに道徳知らずな若者連中を見て嘆く……。かといって, 日本だって褒められた国にはなっていない。金完燮『親日派のための弁明』(扶桑社文庫, 04年)なんて, 明らかに片面的観察のみ。これみて喜んでいたら, たぶん怪我するわ。

玖 わが「研究」のための読書

橘川武郎『松永安左エ門』(ミネルヴァ書房, 04年)を読んだ。「電力の鬼」と呼ばれた電力国家管理にトコトン反対した経営者の評伝である。中国経済史なんかを研究している立場にいと, 日本史の実証水準・理論的精緻にいつも脱帽状態だから, 何かを学び取れるのではないかと思い, 普段からの情報収集を心がけている。

夜中の3時近くになって, もうやめにして布団に行こうかなと思った瞬間,

「アレ？」という名前が目の中に飛び込んできた。「石川芳次郎」である。今年の9月、資料調査のために何回か中国大陸に出向いたが、旧満鉄図書館の蔵書を継承している大連市図書館において、石川さんが書いた「支那事変」直後の華中電力復興草案を、デジカメで撮影してあったので、同一人物かも知れないと直感し、あれこれと調べてみた。

まず、アクロス2階・図書館の参考図書コーナーに行き、復刻されたいいくつかの人名辞典で戦前の記録を探す。京都電灯株式会社の副社長でないかと思通しをつけ、今度は6階にある社史コーナーで、『京都電灯株式会社五十年史』（同社、39年）を借り、彼が「中支電業組合」に関係していたなどの確証を得る。帰宅後、関連した図書が、京大付属図書館や同志社にあることをネットで検索し、300枚くらい複写をとってきた。

戦後は京福電車の社長をつとめ、また京都市名誉市民にも選出されている。府立総合資料館にも、関連した資料があるようで、「発見」から数日で、かなり分厚い「石川芳次郎ファイル」ができあがった。まもなく到着する古本屋のサイトで発見した彼の著作や、京大図書館地下2階で埃まみれになっている戦前期の雑誌の分もあわせると、かなりの分量になるだろう。これらをパラパラと眺めていたら、ごくごく当たり前のことに気づいて、ハッとした。戦時中の日本は、電力国家管理の議論や経験を中国占領地（後に対日協力政権支配地）で実験あるいは焼き直ししようとしただけではなかったのか、と……。

しかし、数冊の本は東京に行かないと見られない。だから飛んでいくんだろな。後先も考えずに……。この何年間か、こんな生活の連続だわ。頭が悪くても、足で名作は書けると信じて。朝から京都で疲れた帰路、吉村昭『海の祭礼』（文春文庫、04年）を読み、勇気が湧いてきた。

拾 ある「疑念」

500頁を超える文庫本を読破した。速読気味の私ではあるが、今回は3日ほ

ど費やしてしまった。保阪正康『昭和史 忘れ得ぬ証言者たち』（講談社文庫，04年）である。

この人は、1939年生まれ。同志社の文学部を出て、出版社などに勤務した後、現代史モノの作家として、玉石混濁ではあるが量産タイプの作家である。そして、この30年近くの間、のべ4,000人、実数では3,000人に「聞き取り調査」を実施したと表明している。確かに、数多くの作品には、縦横無尽な人間観察が現れており、読んでいて楽しいことには異論がない。しかしである、経済学部あたりで教員なんて勤めていると、こういった数字に、まずは疑念を抱いてしまう。

この数字をわり算すると、1年の間に約100人にインタビューした計算になる。1年はだいたい365日だから、3.65日に1人のペースで概ね週に2人を取材しなければならない。全員が東京に住んでいるはずでもなく、移動の日数や準備の時間などを考えると、保阪さんはこの30年の人生を、ほぼ「聞き取り」のために費やしたことになるのではないか？ げんに小生も、週2日の講義のために、かなりの時間は割いている……

もうこれ以上の発言は控えよう。一連の作業を全て1人で行ったら、当然ながら原稿執筆の時間は無くなる。第三者による支援や代替は、必至であっただろう。これを行ったら、学者としては失格になってしまう……。面白さの背後には、複雑なカラクリがある。

どうも目がおかしい。老眼なのだろうか？ 吉村昭『関東大震災』（文春文庫，04年新版）は、大きい活字だから助かる。これくらいの執筆ペースが作家としては無難なんだろう。諸君にも「本物」をみきわめる眼力を獲得してもらいたいもんですよ!!

拾壹 大晦日のわるあがき

年末年始、原稿書きの仕事のペースを読み間違えて、大晦日も元旦も、

BKCの図書館に来てしまった。まあ、鍵を開けて入れれば、事実上は平日と同じように仕事ができるからいいけれど、なんと電気がつかなかった。キーホルダーにつけた懐中電灯も、役には立つけれど、泥棒さんのような気分にもなるから、あまりいい気持ちはしない。

研究推進課にいるお嬢さんたちが、実はぼくらの原稿を取立てる仕事を担当。ニコニコしながら「キッチリ出してください」とか言われると、《立富士》とかいうサラ金の副業も可能ではないかという気もしてくる。しかししかし、遅らせる私に非があるのは明白。

昨年来、偶然いくつかの史料を発掘した。東大経済学部図書館・滋賀大学経済経営研究所・中国の大連市図書館と、その所蔵先はバラバラであるが、何れも「支那事変」勃発直後の上海・江蘇における電力産業と日本との関わりを示す貴重な文書であった。今回は、これを素材に論文を書いてみようかと作業していたのだが、京都府立総合資料館で借りたパンフレットの中で、『京都電灯株式会社五十年史追補』（石川事務所、67年）という書籍の存在を知ったのが、クリスマス直前。京大にも同志社にも無く、堅いのは国会図書館だけだからあきらめていたら、なんと精華町に関西館が開かれており、3日で東京本館の図書を取り寄せられると聞き、イブの頃に寒風吹きすさぶ遠路はるばる借りに言った。

日本の、しかもマイナーな社史であるけれども、何か手がかりがあるのではないかという直感が見事の中！「中支電業組合」という謎の団体について、かなりの事が明らかになった。きっとこれで安心し、年末の執筆速度が低下したんだろうな……。わが直感の正確さを証明する論文、『立命館経済学』高木先生退職記念論文集に掲載されるので、まあ読んでみてください。しかしこの「勘」が、馬だとか釘目などに応用できたら、梁山泊も顔負けの、業師になれるんではないかと思うのは、ちょい悪のりが過ぎたようだ。

拾貳 最終回もわるあがき

最初の頃は、毎回の講義で使うキーワードと思考問題を書いたプリントの「埋め草」にでもしようかと思って書いた乱読日記であったけれど、3ヶ月余りが過ぎて、今回が最終回。台湾から訪日している旧知の先生方と食事をして、かなり遅い帰宅になったから、もうやめにしようかなと思ったけれど、テレビをつけたら阪神淡路大震災10周年のニュースと、かつての中国指導者で、天安門事件で失脚した趙紫陽の逝去を知らせる報道があり、時の流れの速さを感じてしまった。立命館への赴任が決まって早々、近隣の公団住宅などへの入居を申し込んだが、震災のため全てキャンセルされたこと、あわてて京都へ住まいを探しに来たこと、友人とともに神戸へ出向き、その想像を絶する惨状に、かなりの後ろめたさを感じてしまったことなどが、走馬燈のように思い出された。その後、西京区・台北・別府・膳所と慌ただしく生活の場は変化したけれども、家族とともに、書籍はいつも身の回りで散乱していた。だから、読書の「意義」とか、学問の「楽しさ」などを、必死に伝える事は、講義の最終日でも続けてみたいと考えたのである。

正月前後もひき続き原稿書きに追われ、年末の帰省は果たせなかった。大晦日も元旦も、BKCの図書館で過ごすとは、なんとも情けない。横浜・横須賀で少しのんびりした後、ゼミ旅行で別府へ。移動が多かったから、小型の本のお世話になった。川島高峰『流言・投書の太平洋戦争』（講談社学術文庫、04年）は、年越しの一冊。公式の記録には出てこない庶民次元における「戦争認識」の分析は、とりあえずは平和な空間（決して「平和な時代」ではないけれども）に起居する我々にとって、様々な示唆を与えてくれる。ほく自身、恒久的平和の継続を理想とする立場にあるが、現実として世界各地で多発する戦争・紛争を考えると、「戦争」論や「軍事学」に対して、我々が受けた教育が如何に薄弱であったかを考えることもある。年明けになって一読した、潮巨人『常識と

しての軍事学』(中公新書ラクレ, 05年)は、考え方はわたくしとは全然異なるけれど、コンパクトにまとまった情報は伝えてくれる。元・三等空佐出身の大学教員というのも珍しい。まあ、情報は読み手の受け止める能力によって、毒にも薬にもなるんやなと実感した一冊だった。

では、その「能力」とはなにか？ 国語力とか論理性とかで説明することも可能かも知れないが、日常生活社会生活全般を鑑みると、もっと広い「生きる力」につながるのではなかろうか。情報過多の現在、与えられた資料を全面的に信じるのではなく、資料の背後にある書き手の立場、時代性、利害関係など、いわゆる「行間を読む」訓練を重ねれば、たぶん他人から言われるがままに生きるようなタイプの人間にはならないと思う。いまの大学においては、そういった「知恵」を伝授することが大切なのではないかと考えている。

年末年始に往生して書いた拙稿『支那事変』直後、日本による華中電力産業の調査と復旧計画』は、まもなく出版される『立命館経済学』第53巻第5・6号（高木先生退職記念論文集）に掲載されるが、「情報」をどのようにして「批判的」に読み解くのか、強く意識して書いた作品である。まあ、何かの縁があったと思って、配布される雑誌を読んで下さいな。最終回のトリは宣伝にて。

おわりに

以上、集めてみるとそれなりの分量になったから、わたくし自身も驚いている。それとともに「日頃からの積み重ね」という、昔から良く聞かされた、頭では理解していたつもりなんだけど、これまでなかなか実行できなかった習慣の偉大さを、はじめて知らされた作業になった。

なお、昨今の経済的な状況を鑑み、この文章の中でとりあげた本の大部分は、「文庫」や「新書」という、比較的安価で購入できる書籍にしておいた。無論、わたくしはプロであるから、値段に構わず「乱読」して仕事を進めている。し

かし、1,000円もしない図書の中で、こうした知的冒険ができるんだという実例を、是非とも知っていただきたいと願ひ、筆を擱く。

学習参考文献紹介

本文中では、どちらかというとなたくしの趣味の世界——とはいっても、こうした読書の蓄積が、生きる力の源泉であるとは信じている——の文献紹介が中心となってしまった感がある。ここでは、補足的ではあるが筆者が担当する講義に参加する際に参考となるような書物について、いくつかを簡単に紹介したい。

まずは、日本の近代について知るための本から。通史などは数え切れなくらい出版されているが、読んでいて楽しい本を中心に紹介する。いずれも薄い書籍ではなかなりの分量があるけれども、どれか1冊は読破してほしいと願っている。

- ① 黒羽清隆著・池ヶ谷真仁編『日米開戦・破局への道——「木戸幸一日記」（1940年秋）を読む』（明石書店、2002年）

著者の没後、15年を経てから出版された書き下ろし。教え子であり、現在は愛知県の豊川高等学校の先生である編者が、講義ノートや録音テープを素材に編集した本であるけれど、ともかくおもしろい。日本史の一級史料である「木戸日記」をネタに、戦争へとひた走るわが国の状況が、臨場感を持って語られる。一度で良いから、こんな講義をしてみたい。

- ② 秦郁彦『昭和史の謎を追う』上・下（文春文庫、1999年）

筆者となたくしは、おそらく世界観や歴史観にかなりの相違があると思う。しかしながら、「これでもか！これでもか！」と実証に徹する姿勢には、なぜだか大変に共感を覚える。大部の本であるが、一般読者を対象に

書かれた作品であるから、学部1回生でも案外と楽しみながら読めるのではないだろうか。この人が作成した工具書は、確実に100年単位の生命力を持つであろうが、サラッと書いたこの本も、ほくはかなりの生命力があるような気がしている。

- ③ 三省堂百科辞書編集部編『婦人家庭百科辞典』上・下（ちくま学芸文庫、2004年）

1937年の日中戦争開戦直前に発行された家庭向け百科事典の復刻版。70年前の日本において、どのような「知」が求められていたのかを知ることには、近代の意味を考える際にも、たいへん大きな示唆を与えてくれるだろう。特に対象が「婦人」であるということは、戦争という暗い時代の中にも、女性の社会進出（これは、後に成年男性が「徴兵」されたことにより、本格化を余儀なくされた）の息吹が感じ取れるだろう。歴史の多様な側面を認識する上でも、読んでいて楽しい辞典である。

つぎに、中国近代を知るための本。この項目はわたくしの専門分野であるから、当然列挙しだしたらきりが無い。したがって、現在でも入手可能な図書にしぼり、なおかつ時間を割いて読む価値があると判断したものを紹介したい

- ④ カール＝クロウ著・山腰敏寛訳『モルモットをやめた中国人——米国人ジャーナリストが見た中華民国の建設』（東方書店、1993年）

日本人はどうも、前近代からすでに中国に対して特殊な「思い入れ」があるようだ。最近の『文藝春秋』や『産経新聞』系の対中国批判を読んでも、もしかしたらボロクソいっている論者たちは、実は中国のことが本当は気になって好きでたまらないのではないかと考えてしまう。別に民主的な国家・社会体制でなくても、中共が実質的な一党独裁体制の維持にやっきになっていたとしても、余所の国の内政問題なんだから、どうでも良いのではないかと思うのはわたくしだけだろうか？ この本は、

「思い入れ」の多い日本の観察者とは異なった視点から、中国の同時代史を観察した作品で、1920年代前後の雰囲気程良く伝わってくる。訳者はとても勤勉な高等学校世界史担当の先生であり、恐らくは高校生でも読める翻訳をこころがけたのではないかと思う。

⑤ 胡風著・南雲智監訳『胡風回想録——隠蔽された中国現代文学史の証言』（論創社、1997年）

1930年代後半から1940年代の前半、日本が発動した侵略戦争の結果、多くの若者が命を落とした。本来ならば、その後の歴史を創造すべき人々であったから、その後に与えた負の影響は膨大である。日本の場合も、いわゆる「わだつみ」世代の戦死者がもしも戦後も健在であったとしたならば、昭和史の後半はもう少し異なった展開を示したかと思われる。ところが中国の場合、戦争終了後さらに中共政権成立後も、血なまぐさい争乱が続き、多くの人々がその犠牲となった。逆にいうと、権力に対して卑屈で要領がよい人々はこうした災難から脱出することができたのであろうから、「生きるための方便」で屈服を余儀なくされた庶民はさておいて、常に権力中枢のナンバー2であり続けた周恩来など、わたくしは嫌いである。反面、この本の作者である胡風のように、節操を貫いたインテリには、きわめて残酷な末路しか用意されていなかった。気骨の文学者の回想であるとともに、現代中国が失った可能性を知る上でも、有意義な書籍だと思う。

⑥ 市古宙三『中国の近代』（河出文庫、1990年）

もともとは文化大革命の最中の1960年代後半に書かれた通史。しかし、文革支持派・反文革派とも一線を画していた著者は、あえて時流に便乗することなくこの本を書き上げた。21世紀になった現在において読み返しても、その鋭い洞察力と、また分析の的確さには脱帽してしまう。何の変哲もない1冊の概説書なんだけれど、学部学生に対して一番お薦めの入門書である。中国の社会主義は挫折し、現在は実質的な資本主義体制（しかし

ながら、共産党独裁下において開発を猛烈に進めるという意味においては、世界史上でも初めての社会主義政党による上からの資本主義創出過程）である。こうした現状についても、筆者は行間において見事に予告している。物事の根元をみつめることは、一見すると無駄な作業のように思われがちだが、はたしてどれほどの経済学者・政治学者が、かくも見事なる近未来の展望をなし得たのであろうか？ 歴史学の「強さ」と「したたかさ」を雄弁に語る図書でもある。

さらなる文献の紹介を行っても、たぶんあなた方は食傷気味となるのではなかろうか。そして、ここにあげた研究と比較したら、まだまだ未熟で発展途上の水準に低迷しているが、ある科目を履修しようとする場合には、わたくしたちが大学生の頃には、その科目を担当する教員が書いた本や論文を読んでから、教室へ向かうのが常識であった。いまでは、大学院生においてすら、そういった律儀な行動をする人がめっきり減少してきたことは、あまりに嘆かわしい。

わたくしがこれまで書いた共著・論文などについては、立命館大学ホームページの研究者データベースですべて公開しており、また大半の作品は本学図書館で入手が可能である。「東アジア社会経済史」をはじめとする各担当科目を選択する諸君は、ぜひともその幾つかは事前に目を通していただきたい。以上、学習参考文献の紹介であった。